

母の日



母草

老いて尚なほ なつかしき名の
母草（高浜虚子）

母子草。道端や田畑などあちこちに生え、薄黄色の小さな花を咲かせます。

「母」の字の由来は、横にすると胸に二つの乳房がある形になることからとも言われます。「母」それは、命を生み、また育てる。子供にとって、自分をこの世に存在させた特別な人です。

先日、フラワーパークを訪れたとき、一群のカーネーションを前にこう思いました。「なにかしら、花の色は豊かな幅と奥行きがあるようだ」と。

自然界の花の色で、最も多いのは黄色で次が白色だと言われます。赤色はバラの印象が強いですが、実はそれほど多くはないそうです。

この時期、やはり花の主役はカーネーションです。定番の赤と白、その間をいくつものピンクが埋めています。

五月の第二日曜日は「母の

日」。母が家事を仕切る人であれば、母の日も日常に埋没しがちにもなります。だからこそ、母の日は思いをカタチにしてみるのもよいのではないのでしょうか。

福井県丸岡町（現・坂井市）が1993年に始めた「一筆啓上賞」。第一回の募集テーマ「母への手紙」を読み返すと、その思いを強くします。

「いっぱいのお愛をありがとう、ママ。きつと、ボクも、いっぱいのお愛をあげることのできる人になるよ。やくそくさ」というメッセージがあります。

「心は心を育て、愛は愛を育てる」

母の深い愛は平和と命のシンボルでもあります。母親が惜しみなく愛情を注ぎ、子どもたちは感謝し追慕する…。

親と子はいつの時代も、さまざまな感情をぶつけ合いながら時を刻んでいきます。

指宿市長 豊留悦男